

年間第 11 主日 (マタイ 9:36-10:8)

収穫の主に願いなさい



「働きアリの法則」というのがあります。アリの集団の中に「働きアリ」がいますが、実際に働いているのは全体の2～3割で、残りの7～8割は普段何もせずにウロウロしているだけだそうです。効率が悪そうですが、研究によると、全部の働きアリが全力で働いていると、集団が全滅する危険が高まり、長く集団を維持するためには、働かないアリがいざというときに仕事を分散・交代することで、組織として長く存続できることが研究で分かっているそうです。

イエスは、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主願いなさい。」(9・37-38) 信徒総会の日曜日でしたか、「ちょっとずつ教会のために働いてくださってありがとうございます」と、チクッと針で刺しましたが、この「働きアリの法則」を当てはめると、小教区の組織が長く存続するためには、いざという時分散・交代という形が現実的なのですね。その、分散・交代してくれる「収穫のための働き手」を送ってくださるように、収穫の主願う必要があります。

「主に願うこと」「神様に願うこと」は必ず叶えられる。それを信じるためには体験の積み重ねがどうしても必要です。一つ叶ったとして、二つ叶わなかったら、「主に願うことは叶えられない」と考えるでしょう。しかしその積み重ねがあれば、自分の中に「主に願ったことが何度か叶えられた。」また、「叶わなかったことがあったが、それは人生を左右するほどのものではなかった」と感じるようになるかもしれません。積み重ねていく内に、「主に願ったことが叶えられた」という体験が強くなっていく。きっとそうだと思います。

野球の打撃に関する名言があります。「バッターは、ヒットの数の何倍もアウトになっている。」メジャーリーグで三割バッターは超一流のバッターと言われます。毎日毎日、超一流のピッチャー相手に、三回に一回ヒットを打つからです。すると、ピッチャーからすると「このバッターには打たれている」と感じるそうです。六割以上抑えているのに、打たれている感じがするのです。ですから、主に願いましょう。一回願いが叶えられても、その後二回三回、願いが遠ざけられるかもしれません。それでも願いましょう。特に、「収穫のための働き手」については、主に願い求める必要があります。

私が魚釣りを趣味にしているのは誰もが知っている事実ですが、よく私は魚が必要な場面が巡ってくると駆り出されます。人数が多ければそれだけ確率が上がるのもありますが、有り難いことに私は「収穫のための働き手」に数えてもらっているのです。心の中で、今までは単に「手伝い」と考えて出かけていましたが、次にそのような場面が来たら、「収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主願いなさい」とのみことばを自分に言い聞かせて働きたいと思います。

小教区が、信徒の皆さんのたくさんの祈りの収穫を受け取るためには、いろいろな「働き手」が必要です。司祭、修道者。評議会の中には議長、副議長、書紀、アクション団体、経済問題評議会の構成員。それぞれ、役割がありますから、それぞれに「働き手」が必要になります。ふだん一言も話さない人に、ずっと司会をお願いするわけにはいきません。それぞれの持ち味を出せる「働き手」を主に願いましょ。何度願っても叶えられないと思うこともあるかもしれませんが、けれども積み重ねです。何度も願い、その中で一つでも叶えられた体験を、積み重ねていくことです。

最後に小さな出来事を紹介しておきたいと思います。小学生のミサに参加していました。先唱者の指導をする席に、私は座りました。初めて先唱をする子が来ました。ミサが始まるちょっと前に、こう聞いてきました。実はこの子とあまり面識がなかったのですが、こんな質問をしてきました。「神父様になる人たちは、頭の良い人たちですか？」

わたしは少し脈があるのではないかと思いましたが、それをひたすら隠しながらこう言いました。「同級生 17 人いたんだけど、成績 1 番と 2 番の人は神父様にならなかったんだよ。それから、いちばん低空飛行の同級生が最後に神父様になったよ。」最後の部分には食いついてきました。あとは、「収穫の主に願う」それも心から、心を込めて願うことだと思っています。

何度空振りになっても、それでも主に願うことはやめません。積み重ねれば、必ず 3 割を超える。そうなるまで、願い続けるつもりです。

年間第 12 主日((マタイ 10:26-33))